

月刊

地域保健

10
2012

●特集

障害者虐待防止法と保健師活動

●フロントランナー 長瀬比佐子さん〈十和田市健康福祉部 健康推進課 課長補佐〉

●ピープル 阿部 彩さん〈国立社会保障・人口問題研究所 社会保障応用分析研究部長〉



長瀬比佐子
さん

● 十和田市健康福祉部 健康推進課 課長補佐

その人をそのまま受け止め、解決する力をサポートする

「いきいきとした生活をする力」は、その人自身にあります

十和田市

青森県十和田市は、人口6万5355人（2012（平成24）8月末現在）、総面積約725平方キロメートルの市である。八甲田連峰、十和田湖、奥入瀬溪流などの美しい大自然に囲まれ、日本有数の景勝地として知られている。青森県は、太平洋側と内陸では気候が随分違う。たとえば太平洋に近い十和田市の都市部は雪が少ないが、十和田湖周辺は積雪量が多い。太平洋側の地域は、夏に偏西風（やませ）が吹き、冬は八甲田おろしと呼ばれる冷たい風が吹く。昔は三本木原と呼ばれたこの地域は、南部盛岡藩士、新渡戸傳（稲造の祖父）らの手によって開拓された。川を引き、田畑を開き、防風林を植え、行政と住民が一丸となって街づくりをした歴史は、今でも十和田市の人々の心に深く刻まれている。

今月号のフロントランナー、長瀬比佐子さんのいる十和田市保健センター

は、昨年開通したばかりの青森新幹線・七戸十和田駅から約14キロ先の官庁街の一角にある。

人を助ける仕事に

長瀬さんは、十和田市で生まれ育った。小学校5年生のときに、おばあさまがリンパ肉腫を患い亡くなった。現在では治療可能なこの病気も、当時の医療では手の施しようがなかったのだ。そうした状況を目の当たりにし、長瀬さんの中に漠然と「人を助ける仕事につきたい」という気持ちが生まれた。高校生のとき、看護学校を紹介するスライド見て、卒業後は看護学校に進む決意をした。看護学校では市町村実習で地域をまわり、訪問を通じて住民と接する機会を得た。それが楽しくて仕方がなかったそうだ。

「私は祖父母と一緒に住んでいたの
で、同じようなお年寄りとお話しして



いると、なんだかほっとできたんです（ね。看護学校では、保健師と養護教諭のどちらかを選択するコースだったので、保健師のほうを選びました。1人で保健室にいるよりも、たくさんの人とかかわる仕事のほうが、自分に向いていると感じたのです。でも就職が決まって看護学校の先生にまず言われたことが『あなたは保健師本来の仕事ができないかもしれない』ということでした」

長瀬さんは当初、入浴車で状態観察をしながらい浴サービスをする仕事を

10月1日から障害者虐待防止法が施行される。虐待が起こる場所は施設、学校、職場、家庭など広範にわたり、障害福祉主管課だけでなく、労働、教育の機関や高齢者虐待、児童虐待所管部局との連携が求められる。保健師には虐待の早期発見をはじめとして、関係者をつなぐ専門職としての役割も期待される。

障害者虐待の現状をはじめ、保健師に期待される役割、市町村の取り組み事例を掲載する。

障害者虐待防止法と 保健師活動

P18 障害者虐待の現状と障害者虐待防止法 法成立の背景および自治体の役割をみる

◎堀江まゆみ（白梅学園大学）

P28 保健師に期待される役割 3つの虐待防止法を通じて

◎松田宣子（神戸大学大学院）

P35 コアチームを編成し迅速かつ的確な対応を目指す 愛知県蒲郡市の取り組み

◎鈴木康仁（蒲郡市障がい者支援センター）

P42 児童、高齢者、障害者の虐待防止に包括的に取り組む 埼玉県行田市の取り組み

◎野村政子（行田市健康福祉部福祉課）



町の人と、もっともっと 関係づくりを!

入職3カ月目に、はや被災地派遣も経験



すみ おごち え
住尾祥恵さん
●池田町保健福祉課



▲町の観光名所、ワイン城。ヨーロッパの古城に似ている

文・写真 西内義雄 (医療・保健ジャーナリスト)

25年ほど前、駆け出しのライターだった筆者は旅行雑誌の取材のため冬の北海道に居た。幸せの黄色いリボンと石炭の歴史村の夕張、リゾート開発されたトマム(占冠)などを巡り、最後の取材地として降り立ったのが池田駅だった。すでに日は暮れ、宿も当日取ったので素泊まりとなり、紹介された飲食店まで雪道を歩いて行くと、そこはワインバブ。旅行者の姿がない時期だったせいか、なぜかそこに居合わせた町の人たちに大歓迎され、夜遅くまでワインを飲みながら語り合っていた。

また行きたいと思いつつ四半世紀。昔泊まった宿も、ワインバブも営業していることに安堵しながら訪れた保健センターで待っていてくれたのが住尾祥恵さんだ。

前置きが長くなって申し訳ない。ここからが本題です。

両親とも保健所勤務

採用2年目の住尾さんは、お隣本別町出身の24歳。いつものようにご両親の仕事を探ねると、道の職員で保健所勤め。父が臨床検査技師、母は保健師というから驚いた。やはり母の影響があったのだろうか。

「そうでもないですよ。母は家で仕事の話をしなかったのです、子どものころは何をしているのか分からなかったです。逆に父の仕事のほうで検査という言葉だけで理解できたので、母のように(保健師に)なりたいたいと思ったことは全くなかったです」

職業うんぬんというより、転勤が多かったことのほうが印象に残っていた。両親と兄と4人家族。両親どちらかが単身赴任せざるを得ないケースもあり、一緒にそろって暮らしていた期間は短かった。

「学校や住む場所が変わることも当たり前という感じで、行く先々で何か楽しみを見つけていました。両親は英語に書道、水泳、ピアノ、お茶など、私に興味を持ったものはほとんどやらせてくれました。特技はと聞かれればスキーですね。ほぼすべてのスタイルを経験して大会にも出て、最後はモーターに熱中していました」

さすが北海道の人である。ちなみに中学では吹奏楽部、高校では茶道部に所属したというから、さまざまなものに興味を持つタイプの人だったことが分かる。

そんな住尾さんが将来の仕事を意識したのは中学3年のときだった。

「食に関する仕事がいいかなと、栄養士に興味を持ちました。自分がなりたてたものを無理やり見つけようとして出てきた最初の答えでした。同じことは高校でもありまして、いざ卒業を意識する年になってから、また自分がなり